

# 障害の重い子どもを見ることを 支えるアセスメントと支援

平成29年6月19日（月）  
自立活動学習会

佐藤美奈子

「見えているのかどうか分からない。聴覚中心に関わっているが、それで本当によいのか？」

「明暗程度と言われてきたが、少し見えているような気もする。しかし、何を見せたらよいのかが分からない。」

・ ・ ・ と言われる子どもたちを対象に

# 問題の背景

重度の運動障害と知的障害を併せもつ子どもたちは、視覚障害も併せもっていることが多い。

ほとんどが中枢性視覚障害を有していると考えられる。



眼球性ではなく、脳に起因した障害

## <中枢性視覚障害改善チャート> (Roman-Lantzy, 2007)

- ・一つの色を好んで見ること
- ・大きく動くものや光を反射するものに興味をしめすこと
- ・完全に背景を整理した環境でのみ見る行動が起こること
- ・よく知っている対象でも見るまでに時間がかかること
- ・視覚的注意を呼び起こすのは、お気に入りのものやよく知っているものであること

# 中枢性視覚障害の特徴

1. 完全に視覚がないことは稀であること
2. まぶしさを感じる場合が多いこと
3. 色知覚が比較的よいこと（特に赤と黄色）
4. 動くものへの反応が比較的よいこと
5. 周辺視野の反応が比較的よいこと
6. 多くの視覚情報を同時に処理しにくいこと
7. パターン抽出が困難なこと
8. 空間認知が困難なこと
9. 視覚的な反応に時間がかかること
10. 視覚的疲労が大きいこと



# 見えにくさ・見えやすさの疑似体験

## ②おやつの場面

- ・ 2人組で、おやつを食べる人と給仕する人を決めてください。（後で役割交代します）  
用意するもの 紙皿 2人組で1枚  
スプーン 1人1本  
ラムネ、マーブルチョコ
- ・ 食べる人は見えにくい状態で食べてください。（自分で食べる、また、スプーンで食べさせてもらう）

# 見えにくさ・見えやすさの疑似体験

## ③色指標を使ってみましょう

- ・ 蛍光色、普通色を見てみます。
- ・ ペアになって、一人が指標を提示し、一人が疑似体験眼鏡を付けて見ます。提示の仕方や光等の条件でどのように見え方が違うかを体験してください。

# 見えにくさのある子どもへの基本的な環境設定の配慮点

- 見えにくさを軽減するための光の量
- 光源の位置
- 見せたいものとその背景のコントラスト
- 視野の障害

# 評価結果を支援につなぐ

## 光覚についての情報

- ・ 光がある状態とない状態の違いが分かるのか。
- ・ 光が分かるとすればその距離は？光の強さは？

これらの情報があると・・・

- 昼夜の生活・睡眠リズムをつける手がかりにする。
- 光の点滅や変化による「見る遊び」の工夫
- 光を背にして人が近づいてくることが分かるかも  
直接体に触れられる前に予測ができる。
- 光の方向で部屋の窓の方向が分かり、自分の位置、  
移動や場所の手がかりとして使える。

# 評価結果を支援につなぐ

## 色覚についての情報

- ・色が分かるとすれば、どんな色？どのくらいの距離？どの方向？どのくらいの面積？

これらの情報があると・・・

- 子どもにとって大切な人を見分ける信号として色を使うことができる（担任の先生はいつも赤色）
- 自分で飲み物を取れるように、コップの色を子どもが分かる黄色にして、黒いお盆の上に置く。
- 大好きなシーツブランコが始まることが離れていても予測できるよう、鮮やかな赤のシーツを揺らして見せる。
- 鮮やかな緑の布を手がかりに自分の教室が分かる。